徳川園の歴史的考察

(2) 徳川義禮候邸宅について

宮　崎　幸　恵

The Historical Consideration of Tokugawa-en

Part 2: Marquis Tokugawa Yoshiakira's Residence

Sachie Miyazaki

1. はじめに

先の「徳川園の歴史的考察 (1)園内の遺構とその起源について」において園内およびその周辺の遺構およびそれらの遺構の主な起源となった尾張徳川家名古屋大曽根邸の変遷について明らかにした。[1] 本稿では明治33年に完成した徳川義禮候邸宅（尾張徳川家名古屋大曽根邸）の建築構成を明らかにし，明治期における和洋折衷住宅と比較し，その位置づけをしようとするものである。

2. 調査方法

名古屋市蓬左文庫，財団法人徳川黎明会および徳川林政史研究所の協力を得て，尾張徳川家名古屋大曽根邸（徳川義禮候邸宅）に関する史資料等を参考に調査した。

3. 徳川義禮候邸宅の完成に至る過程

元禄８年（1695）尾張徳川家２代藩主光友が成瀬・石河・渡邊三家老の下屋敷を上地させ造成した約130,000坪にも及ぶ隠居所は，元禄13年（1700）光友の死後，屋敷地の大部分を元の家老らに返還し，御殿部分を残して約50,000坪となった。享保５年（1720）にこの御殿部分も成瀬家に返還し，大曽根の地における尾張徳川家の敷地はなくなり，この状態が江戸末期まで続いた。

明治元年尾張徳川家は，現在の徳川園を中心とした地域に存在した成瀬・石河家の下屋敷を再び上地させて別邸とした。[2] また，明治維新に伴い名古屋城を明け渡すことになり，明治５年

に名古屋城北部の奥山町に別邸とは別に新邸を設け，ここに住居を移した。

当時別邸内の建物は少なかった[3]。しかし，明治23年奥山町の屋敷地が陸軍省の用地（北練兵場）となったため，奥山町邸の多くの建物を別邸内に移築ならびに新築した。

当主の徳川義禮候は東京に在住していたが，明治26年に名古屋に移住することになり，大曽根邸を本邸として整備する必要が生じた。当時大曽根の屋敷地には，前述のように奥山町邸からの移築された建物等があった。これらは主として住居部分のみで客室がなく本邸の構えとしては不十分であり，規模的にも機能的にも充実した，新しい時代を反映した建築構成が求められることになった[4]。

そこで江戸期に建てられた徳川家市ケ谷邸内の建物図を参照し，また新しい時代にふさわしい様式に建築するため文部省技師久留正通[注1]に設計を依頼した。彼は市ケ谷邸を参考に設計したと伝えられ，明治28年基礎工事に着手，同32年上棟式を行ない，翌33年尾張徳川家名古屋大曽根邸は完成した[4]。

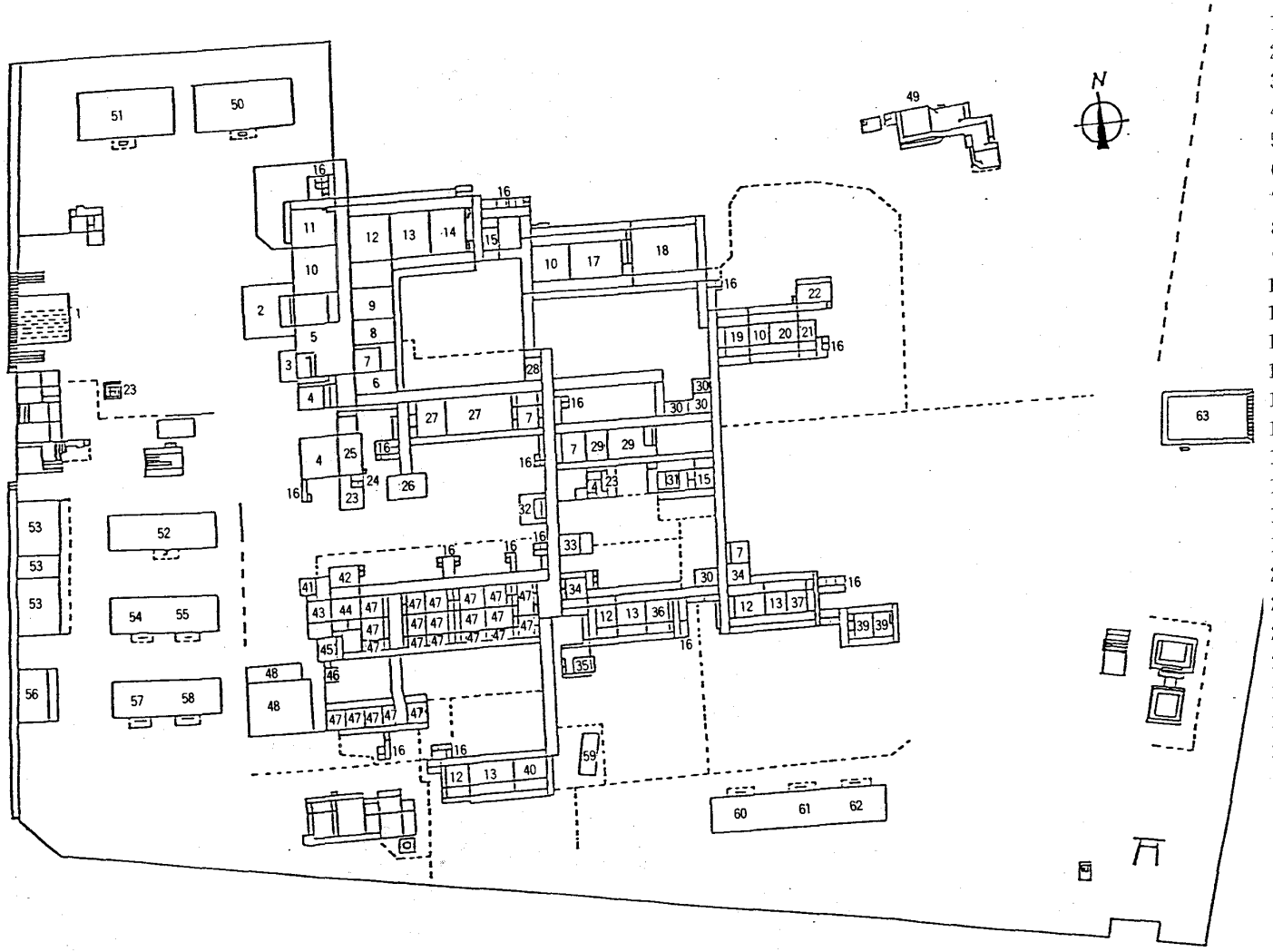
4．完成期の建築構成

完成された尾張徳川家名古屋大曽根邸の一部は，昭和６年に財団法人徳川黎明会へ移管され，その敷地には徳川美術館が建設された。また一部は名古屋市へ寄贈され，かつての大曽根邸の屋敷地および建物の一部が市民に開放されることになり，徳川園が誕生した。このように徳川黎明会に移管された敷地，名古屋市に寄付された敷地（徳川園）および小規模になった大曽根邸敷地の中に存在した建物も第二次世界大戦による戦災などでその多くが焼失し，現在では当時の姿を留めていない。しかし，完成当時の建築構成を伝えると考えられる平面図[5]（図１）とわずかな戦災前の写真が残っており，これらにより当時の姿を知ることができる。

この平面図にみられる建物には明治33年以前に移築新築されたものも含まれており，どの部分が久留によって設計されたかは現在のところ明らかではない。しかし，設計の主な意図が客室を設けることであったことから，書院，使者の間等のある一連の接客部分は，久留による設計と考えられる[6]。

完成時の建坪は約600坪であり，敷地は庭園を含めると約6,350坪であった。木材は主として旧尾張徳川藩領の木曽の木材（檜の良材）を帝室御料局より買い受けて用いた。また，庭石には旧名古屋城二の丸の庭園にあったものも使用したと記録されており，贅をきわめた邸宅であった[2)4]。

西側に正門があり，正門を入った正面に玄関を設けている。この玄関の写真（写真１）が残っているが，大きな車寄せがついていたことが判る。玄関の左に次の間，使者の間があり，右には玄関脇の間，中玄関があり，廊下を隔てて詰番室がある。この構成は，玄関の左に使者の間，右に侍詰所を設けた江戸期の大名屋敷[注2]の間取りを受け継いだものと言える。明治17年に創



1．正門
2．玄関
3．中玄関
4．土間
5．玄関脇の間
6．詰番室
7．付属室
8．次の間
9．応接の間
10．次の間
11．使者の間
12．三の間
13．二の間
14．書院
15．脱衣室
16．厠
17．中奥御間
18．西洋御間
19．納戸
20．寿の間
21．床裏の間
22．御三階の間
23．井戸
24．浴室
25．台所
26．土蔵９号
27．事務室
28．宿直室
29．御膳所
30．押入
31．御湯殿
32．玄関（その２）
33．女中詰所
34．茶の間
35．茶席
36．菊印様御間
37．御本間
38．炊所
39．御神間
40．旧御二階下御間
41．玄関（その３）
42．応接室
43．勝手
44．板の間
45．入浴場
46．物入
47．女中部屋
48．物置
49．茶屋
50．土蔵１号
51．土蔵２号
52．土蔵３号
53．１号物置
54．土蔵４号
55．土蔵５号
56．８号物置（土蔵８号？）
57．土蔵６号
58．土蔵７号
59．溜水
60．土蔵10号
61．土蔵11号
62．土蔵12号
63．土蔵13号

図１　徳川邸建物平面図

建された水戸徳川家戸定邸においてもこの形式を採用している。[7)]

使者の間から渡り廊下で東進したところに書院がある。書院には上手の間に床の間がある。これは江戸時代の大名屋敷の大書院あるいは小書院に相当し，公式の接客の間として使われたと考えられる。書院および書院入側に設置されていた照明器具のスケッチ（図２）が確認されている。[8)] それによると洋風のランプであり，後に記す西洋御間にふさわしい感じがする。書院の上手に隣接する客用厠もすでに江戸時代にその例がある。書院をさらに東進すると次の間，中奥御間，西洋御間がある。これらの部屋は主人の居間として使われたと考えられ，江戸時代の大名屋敷で御居間と呼ばれていた部分に相当する。[7)] 設計者久留正通は，伝統的な造りの中に当時より流行しはじめた住まいの洋風化を積極的に取り入れ，新しい空間造りを目指し，当時盛んになった大邸宅の洋館部を意識していたものと考えられる。また当主の義禮は明治17～20年にかけて英国に私費留学しており，[9)] ロンドンやパリ（滞在国は英国となっているがパリで撮影した義禮の写真が現存している）で西洋の建物を多く視察していたはずであり，自ら洋間を取り入れることに積極的で，久留に要請したとも考えられる。西洋御間の照明器具についてはスケッチや記録類は発見されていないが，書院に設置されていたものに類似していたと考えられる。西洋御間から廊下を経由してさらに東進すると次の間，寿の間，床裏の間，御三階の間がある。これらも主人の居間の続きと考えられる。しかし御三階の間（三階小座敷）は，明治27年徳川家東京横網町邸より移築されたものであり，[4)] 久留の設計によるものではない。御三階の間より北東の位置に茶屋があり，この北に池が配置されている。敷地の南にある棟には，上記玄関の他にもう１つの玄関があり，その右に女中詰所，茶の間，茶席がある。

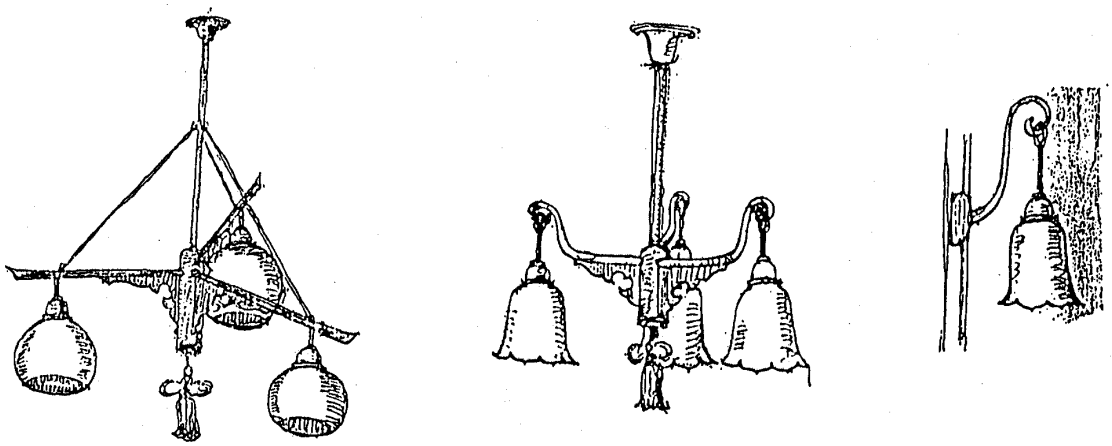


図２　照明器具のスケッチ

茶の間から西進すると女中部屋が続き，東進すると三の間，二の間，菊印様（義禮夫人良子をさす）御間がある。三の間，二の間，菊印様御間は夫人の居室部分であり，大名屋敷では御守殿あるいは御上方に相当する。これらの部屋のうち，少なくとも女中部屋は，明治24～27年

に新築されたという記録があるので，久留による設計ではない。

菊印様御間をさらに東進すると茶の間，三の間，二の間，御本間がある。これらも夫人の居室として使われていたと考えられる。茶の間を南進すると旧御二階下御間，二の間，三の間がある。これらも夫人の居室として使われていたと考えられる。御本間は明治27年１月に大工棟梁・第５代鈴木幸右衛門により設計施工されたという記録[10)]が残っているので，これらの女中部屋や夫人の居室を構成している棟は久留による設計ではないと推察する。御本間をさらに東進すると御神間がある。部屋名称としては珍しいが御神＝御上としてつけられたのか，あるいは神社の傍にあるため神の部屋としたのか，新しい部屋（神＝新）の意味でつけたのか不明である。現存する大曽根邸の写真の中に御新間を撮ったものがあり，それはここに相当すると考えられるので新しい部屋の意味でつけられた名称とみるのが妥当かもしれない。

一連の女中部屋の西側には玄関（その３）があり，玄関から入ってすぐ東側には応接室，南側には勝手がある。浴室も近くにあることなどから，この玄関は主として使用人の出入りに用いられたものと考えられる。

屋敷内の多くの蔵（９棟13号蔵まで）は徳川家伝来の貴重品や什器，蓬左文庫[注3]などの書物が入っていたものと考えられる。

以上から，明治33年に完成した大曽根邸の平面構成[6)]は，次のようにまとめることができる。

(1) 基本的には江戸期の大名屋敷の形態を踏襲している。

(2) しかしながらひとつひとつの部屋の大きさは小さくなっている。

(3) 西洋御間など当時の流行を取り入れた邸宅である。

なお，諸大名の江戸屋敷において広間が縮小され，小広間的なものになる傾向が寛永頃から進行していたと考えられている。この傾向は，明暦の大火に伴う経費の節約および梁間の制限などによってさらにおし進められ決定的になった。同様に大名屋敷においてもその傾向があったことが判明している。[11)]

５．屋敷建物の古写真

徳川林政史研究所[注4]において徳川家の写真が整理され，名古屋大曽根邸を撮影した写真[12)]が現存していることが判った。これらの写真はいずれも名古屋の中村写真館所属の海部幸之進[注5]により撮影されたものであるが，撮影時期は現在のところ不明である。

(1) 恭公御間その１〈大曽根邸義禮住居外観，写真２〉

屋根は寄棟造で茅葺である。屋根上部には避雷針が設置されている。また庇も茅葺きである。庭は芝生が植えられ，和洋折衷庭園を感じさせる。戸定邸の庭園とも類似している（**写真３**）。

写真 1

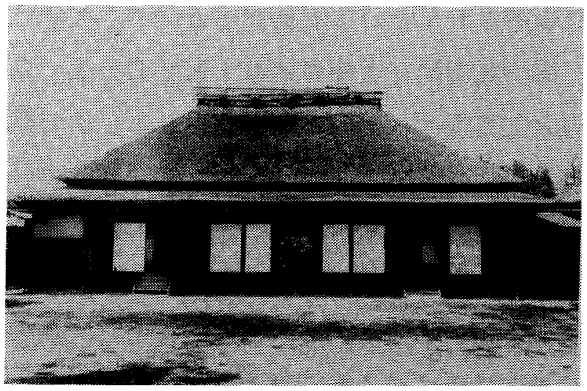


写真 2

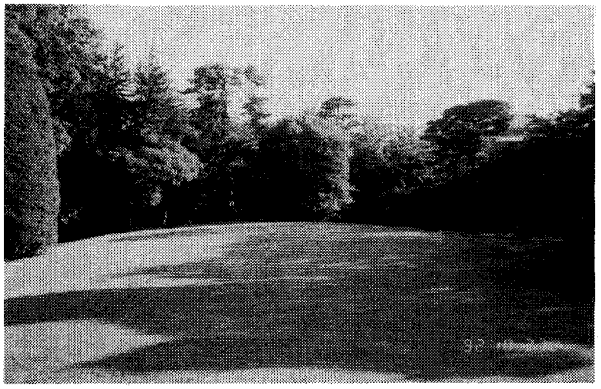


写真 3

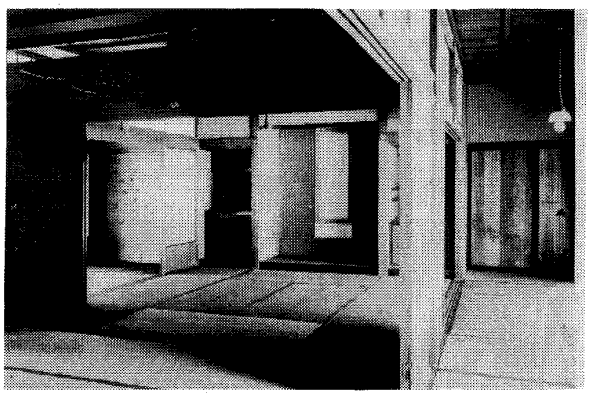


写真 4

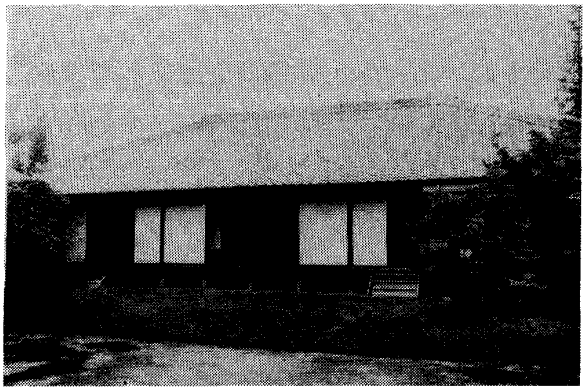


写真 5

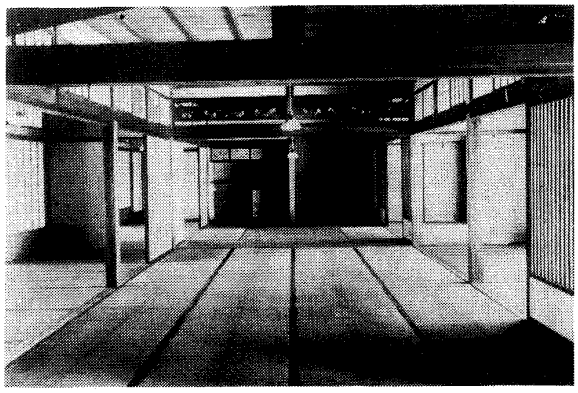


写真 6

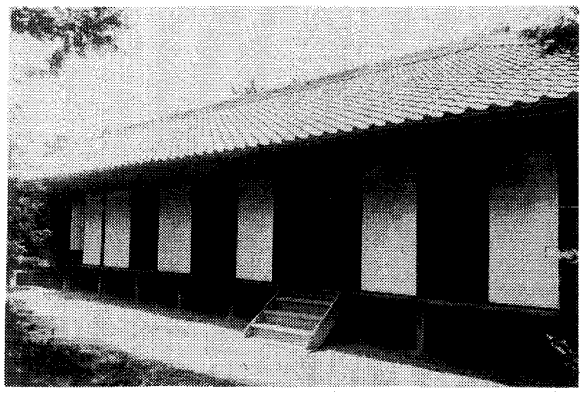


写真７

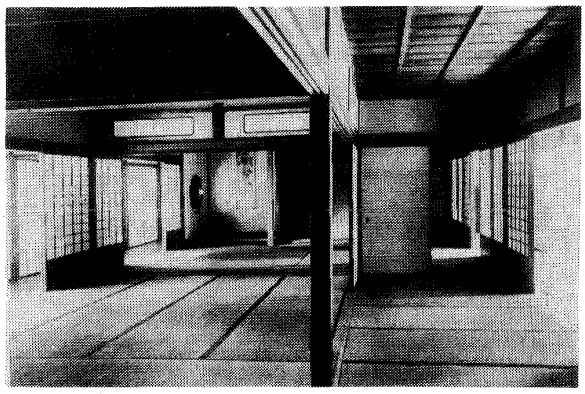


写真８

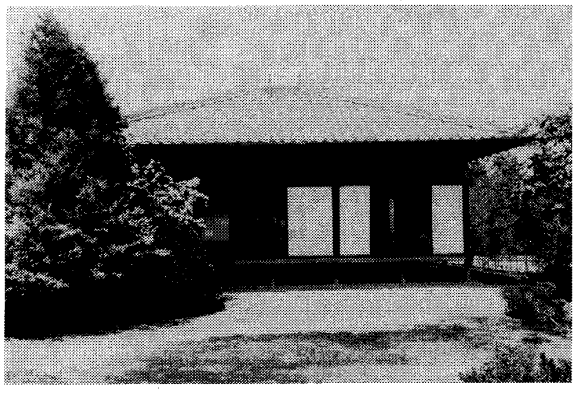


写真９

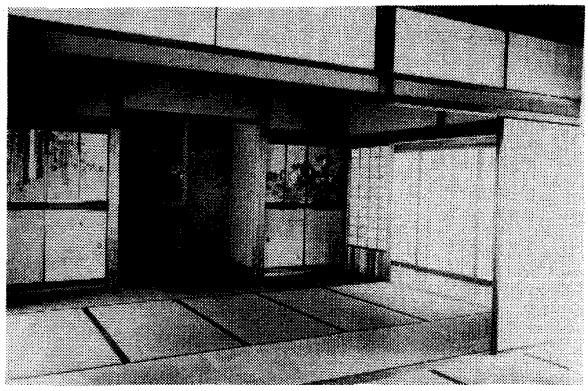


写真10

(2) 恭公御間その２〈大曽根邸義禮住居内部，写真４〉

床の間付きの８畳が写されている。釘隠しには，桜の花を数個かたどったものが付けられている。襖絵は鳥が飛び立つ様が描かれている。この写真からは判別しにくいが，欄間にも鳥が描かれている。戸定邸にも鳥（ふくら雀）の意匠を扱った欄間があるが，デザインは異なる。入側部分の襖絵には笹が描かれている。照明器具は当時の流行のものと考えられるが，書院及び書院入側の照明器具のデザイン（図２）とは異なる。この写真の撮影位置および方向を図３（矢印ア）に示した。

(3) 菊印様御間その１〈大曽根邸良子住居外観，写真５〉

屋根は寄棟造で桟瓦葺である。屋根上部には避雷針が設置されている。前庭には芝生が植えられており，和洋折衷庭園となっている。約５尺ほど下がって広場となっているように見受けられる。

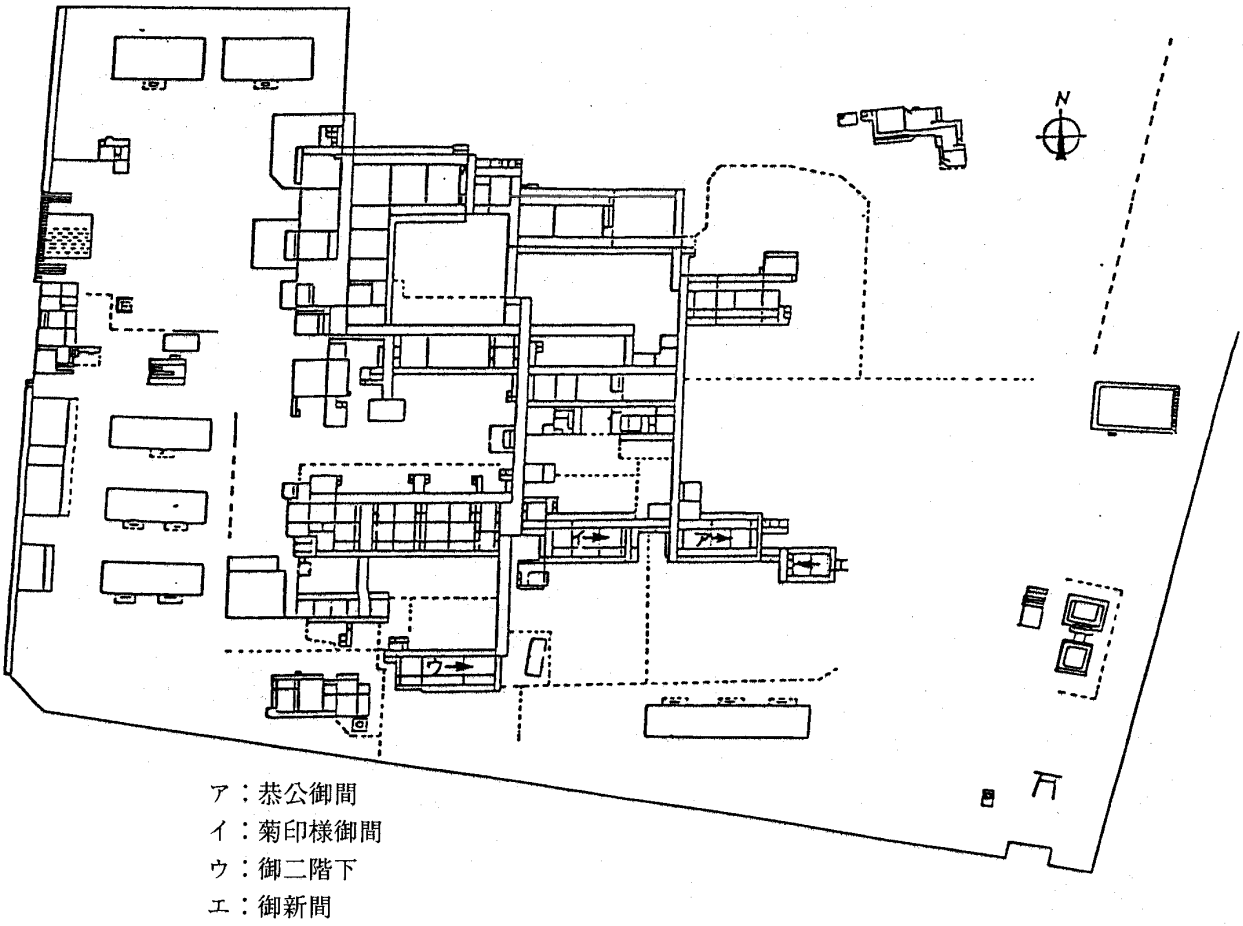


図3　写真の撮影位置

(4)　菊印様御間その2〈大曽根邸良子住居内部，写真6〉

床の間付きの部屋の欄間の意匠は，花のある植物をモチーフにしている。またこの部屋の袖壁の意匠から，床の間はついているもののプライベートな空間と推察する。照明器具は，恭公御間に用いられているものと同種類である。この写真の撮影位置および方向を図3（矢印イ）に示した。

(5)　御二階下その1〈大曽根邸御二階下外観，写真7〉

屋根は寄棟造で桟瓦葺であり，前庭には芝生が植えられている。

(6)　御二階下その2〈大曽根邸御二階下内部，写真8〉

畳敷入側と10畳（床の間なし）および8畳（床の間付き）の部屋が写っている。床の間の部分には丸窓が設けられている。欄間の意匠はすっきりした形になっている。この写真の撮影位置および方向を図3（矢印ウ）に示した。

(7) **御新間その１〈大曽根邸新間外観，写真９〉**

屋根は寄棟造で桟瓦葺である。屋根には避雷針が設置されている。無双窓の様子を見ることができる。前庭には芝生が植えられ和洋折衷庭園と考えられる。

(8) **御新間その２〈大曽根邸新間内部，写真10〉**

縁側（板張り）と10畳（床の間付き）および10畳に続く部屋の一部が写っている。床脇の両側に天袋および地袋がある。向かって右側の天袋の引戸に描かれている絵は蓮の花のようである。欄間には紙障子が入っている。10畳の部屋と縁側との間仕切りには，４本引きの腰障子が入っている。また10畳に続く部屋の襖は４本引きで，一部に瓢箪の絵柄が入っている。この部屋の名称は御新間と記されているが，間取りから考えると徳川邸建物平面図[5]では御神間と記された部屋に相当し，１つの部屋を御新間又は御神間と表現していたことが判明した。この写真撮影の位置及び方向を図３（矢印エ）に示した。

６．和洋折衷住宅としての義禮候邸宅の位置づけ

わが国の住宅への洋式輸入という点で忘れられないものの一つに大邸宅の問題がある。これは年代的にみると，政情の安定した明治20年以降に盛んになったものと言うことができる。尾張徳川家名古屋大曽根邸の基礎工事が始まったのは明治28年であり，大邸宅の建築がさかんになった頃と重なっている。前述のように大曽根邸の設計は，当時にふさわしい様式になるよう文部省技師久留正道に依頼された[4]と記されている。江戸期における大名屋敷の形態を踏襲しつつ，その中に〈西洋御間〉を取り入れ，また入側部分に洋風のランプ[8]を取付けるなどは，当時流行していた住宅の和洋折衷および洋風化を積極的に取り入れようとしたものと考えられる。

ところで大邸宅を考えるとき，昭和16年の全国都市住宅調査の統計を見ると，60畳以上の居住室を有するものはわずか1.1％であった。明治時代では数の上からみれば，ごく限られたものであったに違いない。都市住宅史を全般的に見渡すとき，大邸宅の影響はごく限られたものであったことは言うまでもない。しかしながら，そのあり方が派手で目につくために世間の耳目を驚かし，世の中の好奇心をさそったのであろう。明治32年の建築雑誌150号では，黒田候爵邸をとりあげ，「(明治極初期の）珍建築にして……其体裁何となく未だ全く欧風の趣味を咀嚼せざるが如き所あると同時に又無邪気愛すべき穉気と之に伴へる大胆鷹揚なる手法とを存し，本邦建築歴史上の好標本となるものなり……」と評しており，[13] 当時の関心のあり方を伺い知ることができる。

明治時代の大邸宅の所有者は，皇族，旧公家，旧大名及び明治維新の遂行に力のあった高級官僚や豪商であり，華族と呼ばれた人々にほとんど限られていた。[14] このような時代背景を考

えても，上流社会のステイタスシンボルとして，〈当時にふさわしい様式〉＝〈西洋御間〉という形で洋室を設けたものと考えられる。名古屋大曽根邸の設計者である久留には江戸の市ケ谷邸を参考にするという条件があったため，完全な西洋館の形は取り得なかったと推察する。いずれにしても洋室を設けることにより新しい生活様式を導入し，生活空間の多様化を求めようとしたものと考えられる。

西洋御間の詳細については写真等がないため，床が板張りであったか畳敷でその上にジュウタンを敷いていたかなど，意匠や使われ方については不明である。昭和6年に名古屋市に寄付された建物の中にこの西洋御間も入っている。[15] その時には食堂に改装されていたことが判明し，家具としてイスとテーブルが使用されていた。また設備としてストーブが入っていた[15]が，食堂に改装される以前の家具や設備については未詳である。しかし部屋の名称を西洋御間としていたことからイス座であったと考えられる。応接の間についても，西洋御間と同様に意匠や使われ方は不明である。この部屋も昭和6年に名古屋市に寄付された建物の中に入っている。[15]

大曽根邸は，当時流行していた大邸宅の洋館部と比べると洋室が二つしかなく，またそれらの部屋の大きさ（西洋御間：約50畳，応接の間：約18畳）も洋室の尺度から考えると決して大きいとは言えず，類似性を見いだすことはできない。しかし，当時の〈住まいの洋風化〉を和風建築の大邸宅に導入した新しい形の和洋折衷住宅とみることも可能である。

注1：久留正通（くるまさみち，1855～1914）

山口半六のあとをついで文部省の建築課長となった人で，工部大学造家学科（後の東大工学部建築学科）の第3回生として卒業後，工部省を経て文部省技師となり，多くの建築設計を行なうとともに，本格的な西欧建築の理論や技術の研究をもとにして，「学校設計建築大要」などを公刊して学校建築の発展に力を尽くした。「明治工業史」は山口半六と久留正通の二人を明治期における学校建築の功労者としてたたえている。彼の設計による建築物の中で現存しているものには，旧第四高等学校および旧第五高等学校物理化学教室がある。[16]

注2：江戸期の大名屋敷

基本的には上屋敷（大名の居所，将軍の御成を迎える所），中屋敷（隠居所，夫人や嗣子の居所），下屋敷（火災時の避難所，荷物の荷揚げ，菜園他，郊外に設けるのが普通）とに分けられる。このうち下屋敷は，江戸中期以降になると庭園を設けた遊楽施設（例：六義園，戸山荘など）へと変化していく。[17]

注3：蓬左文庫

蓬左は名古屋の古名である。元和頃（1620年頃）初代藩主義直が父，家康から譲られた図書約3千冊を中心に創設した尾張藩の文庫である。昭和25年に名古屋市の所有となり，名古屋市博物館の分館として東区徳川町「徳川園」のなかで一般公開されている。蔵書

の内容は日本・中国・朝鮮の典籍と尾張関係の史料を主とし，総数約10万点，うち和書7万5千点（古文書・古地図等を含む），漢籍2万5千点，ほかにオランダの古書などもある。

注4：徳川林政史研究所

大正12年に徳川義親により開設された。尾張藩の政治及び経済史料を所蔵し，その研究と史資料の整理を行なっている。

所在地：東京都豊島区目白3－8－11

注5：海部幸之進

海部敏樹（元首相）の祖父にあたる。彼が所属した中村写真館の所在地は，名古屋公園東口，OHSU–PARK NAGOYA JAPAN と記されている。明治期の名古屋の著名な写真家に中村牧陽がいる。[18] 中村は明治27年，大日本写真会名古屋支部代表者であった。この写真会は第二次世界大戦後解散したため未詳であるが，中村写真館は中村牧陽が経営していた写真館であったと考えられる。

7．謝　　辞

本論文をまとめるにあたり，名城大学理工学部建築学科伊藤三千雄教授に指導を頂いた。深く感謝致します。また，史資料の提供ならびにご協力を頂いた名古屋市蓬左文庫，徳川黎明会，徳川林政史研究所の方々に深く感謝致します。

参考文献，参考史資料

1）宮崎幸恵，徳川園の歴史的考察　(1)園内遺構とその起源について，東海学園女子短期大学，紀要第28号，1993
2）斎藤俊之助編，名古屋郷土叢書第三巻（東大曽根町誌），東大曽根町誌刊行会，1941
3）宮崎幸恵，尾張徳川家名古屋大曽根邸　(2)建築構成の変遷について（明治33年以前），日本建築学会東海支部研究報告集，1993
4）歴史的建造物研究会，名古屋市蓬左文庫旧書庫報告書，名古屋市蓬左文庫，1993
5）徳川邸建物平面図〈124cm×102cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
6）宮崎幸恵，尾張徳川家名古屋大曽根邸　(1)建築構成について，日本建築学会大会学術講演梗概集，1992
7）戸定邸（旧徳川昭武松戸別邸）の保存修理に関する調査書，松戸市教育委員会，1991
8）照明器具スケッチ〈30cm×25cm，25cm×20cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
9）手塚晃，国立教育会館編，幕末明治海外渡航者総覧第二巻　人物情報編，柏書房，1992
10）伊藤三千雄・水野信太郎，大工棟梁　鈴木幸右衛門について，名城大学理工学部研究報告第22号，1982
11）佐藤巧，近世武士住宅，叢文社，1985
12）☆恭公御間，大曽根邸義禮住居外観〈15cm×20cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
☆恭公御間，大曽根邸義禮住居内部〈15cm×20cm〉，財団法人徳川黎明会蔵

☆菊印様御間，大曽根邸良子住居外観〈15cm×20cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
☆菊印様御間，大曽根邸良子住居内部〈15cm×20cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
☆御二階下，大曽根邸御二階下外観〈15cm×20cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
☆御二階下，大曽根邸御二階下内部〈15cm×20cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
☆御新間，大曽根邸新間外観〈15cm×20cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
☆御新間，大曽根邸新間内部〈15cm×20cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
13) 黒田候爵邸，建築雑誌150号雑録，1899
14) 太田博太郎編，住宅近代史，雄山閣，1969
15) 名古屋市会事務局編，名古屋市会史第6巻，名古屋市会事務局，1942
16) 工学会編，明治工業史　建築編，工学会，1927
17) 国史大辞典編集委員会編，国史大辞典第8巻，吉川弘文館，1987
18) 財団法人岩崎与四郎育英会，写真集「明治の横浜・東京」－残されていたガラス乾板から－，かなしん出版，1989